

国語（中三卒業論文）

今回の論集では、多くの佳作の中から、それぞれ特に優れたものの三本を、掲載の運びとした。以下にその掲載理由をそれぞれ簡潔に記した。参考にしてもらいたい。

（小檜山・中島・大石）

「蠅の王」における人間の心底に潜む悪について

孤島での集団生活を余儀なくされた少年たちの「社会性」に注目し、一般社会との対比・類似を意識しながら、その比較の中から作者の真意を説明するという、この作品読解における王道を、着実・丁寧に、歩んでいるという観点から好感を持った。また、表現・文章が素直であり、章立てやその間のつながり・結論との関係も良く吟味されており、班員間での討議が良くなされているとの好印象をも抱いた。

ゴールディング「蠅の王」論 ―悪はどこにあるのか―

一作目と対照的ともいえるが、少年たちの置かれた非日常的時空で生じた対立や事件を、単に「悪」という概念に結びつけて捉えるのではなく、具体的な出来事の連鎖を通し、それらの重なり合い方から、悲劇の到来を読み取ろうとしている。全ての根源は、人間にもともと備わる「悪」にあるという捉え方そのものを、批判的に考察の対象に据えたところが出色である。また、それぞれの章立てでも、結論を上手く支える構造になっているところを評価した。

「ノルウェイの森」における村上春樹ワールド―表と裏の世界―

作品の細部にまで目を配りながらも一貫した論理に基づいて作品を論じきっており、論文としての完成度は高い。この完成度の高さは、「結末の謎」（回想する現在に戻ることなく作品が閉じられる）を説明するという序論の問題設定から導かれた、「回想する現在」への着目に拠るところが大きい。要するに論文は初めの課題をどう立てるかが重要なのである。

第一章、「突撃隊」の造型を踏まえた上で「蛍の光」の意味を明らかにしていくという手続きの確かさが光る。第二章、登場人

物の関係性が正確に捉えられている。第三章、脇役とも思える人物達の死にまつわる共通点を抽出し、作品における死の位置付けを考えていくという手続きの踏み方はやはり優れている。第四章、ビートルズの「フルウェイの森」の解説がユニークで面白い。結論部、全体の分析が一つの結論に収斂しており、見事である。ただ、第三章の分析と齟齬をきたしている部分が一箇所見受けられる。全体の一貫性が見事なだけに、残念である。とはいえ、優れた論文であることに変わりはない。強く推薦する次第である。

「蠅の王」における人間の 心底に潜む悪について

中三―三 市川 雄一

◎菅野貴美幸

小池 洋平

西尾 亮太

橋本 慧

第五節 この対立のもつ意味

では、最後に、これまでの検証を基に、この一連の対立のより深い原因、そしてそれを通してゴールドディングが言いたかったことを考えてみよう。

其の一 「規則」の問題

ここでは、ラーフの社会の問題点という視点から考察する。二人の対立の直接の原因は、考えの違いから生まれた不和だった。しかし、例えば「背信・逸脱行為を禁ずる」という規則がもしあったら、ジャックの離脱は避けられたかもしれない。問題点の一つはこれである。ラーフの社会における規則らしい規則といえは、「ほら貝をもっている者が発言権を有する」だけであった。この規則だ

けで、生活上のすべての秩序を維持できるはずがない。つまり、秩序を維持するために必要な規則のほとんどが、ラーフの社会には欠如していたのである。また、ただ規則が存在するだけでは不十分だ。罰則が必要である。規則に罰則がなければ、規則を破ったとしても罰せられることはなく、まさに破り放題となってしまうのだ。これでは規則の意味がない。しかし、ラーフの社会はまさにその状態だった。これがもう一つの問題点である。ジャックは、前述の「ほら貝を持っていてる者が発言権を有する」という規則があるにもかかわらず、ラーフやピギーの話の最中に頻繁に口を出し、彼らはその都度「ぼくがほら貝を持っているんだぞ！」と怒るのだが、そんなことを繰り返しても埒が明かない。規則を作った時点で、規則に反した者に対する罰則も、同時に設けておくべきだったのである。では、ここでさらに掘り下げてみよう。もしラーフの社会に罰則を伴う規則が十二分に備わっていれば、このような悲劇は起こらなかつたのだろうか。

我々はこれを、現代法治主義社会との比較によって推測する。現代法治主義社会は、法律によって秩序が維持されている。人々が法律に従う理由は、違反すると刑罰を受けるからである。法律に背く者が現れると、警察はすぐに彼を捕まえ、処罰する。しかし、もし仮に、彼に警察その他一切のものを凌ぎ、押さえつけられる力があるなら、彼は法律に縛られず自由に行動できる。自分を捕まえ罰することのできる力を持つ者がいないからだ。だが、現代社会において、警察などの治安維持機関が持つ強大な力を上回る者など皆無に等しく、人々もそれを認識しているため法律に従うのである。

では、これをラーフの社会に当てはめるとどうだろうか。ジャックが現代法治主義社会の大抵の人々と同様に、制裁を恐れておとなしく規則に従えばそれで事は済むのだが、そうはいかない。彼らがいる無人島は、現代社会とは状況がまったく異なるのだ。大人は一人もおらず、周りには自分より小さい子供たちばかり。その上彼は他人を縛ることは好むが、自分が縛られることは嫌う。そのような彼の性格も考えれば、彼が規則を破り、自分の力を行使してでも制裁に抵抗しようとするのは明らかだ。そんな彼に対して、ラーフが制裁を強行できるだろうか。ジャックには狩猟隊が味方につくだろうし、むしろ逆に彼らの力に押し潰されてしまうのが関の山であろう。

我々がこの推測から言いたいことは、たとえ罰則があつたとしても、結局は同じ運命を辿るであろうということ、そしてその根拠はラーフの社会にはジャック一人を抑え得るほどの力もなかつたということであり、それはジャックの離脱後、いとも簡単にラーフの社会が崩れ去つたことからわかる。また、それは同時に、法治主義社会の絶対主義社会への敗北を意味している。つまり、いかなる規則も力と悪の前では簡単に無力化してしまうもので、それを防ぐには、力や悪にも打ち勝てる堅固な基盤と組織をもつた社会、そしてそれを構成している一人一人の人間の強靱な意志が必要だということなのである。そして、これらは取りも直さず、ゴールディングがこの対立を通して言いたかつたことなのではないか。

其二 「子供だけ」の問題

この一連の対立には、さらに重大な原因がある。それは、「島にいた人間が全員子供だった」ことである。規則を無視して自由に遊び、烽火の重要性を理解できず肉に魅せられ、「獣」に怯えてしまうといったトラブルは、彼らが子供であるがために引き起こされたものばかりである。では、このような状況設定をしたゴールディングの意図とは何だろうか。

人間は、生まれてから成長し、大人になるにつれて様々な経験をし、それを通して新たな知識を身に付け「人生の知恵」を修得していく。そしてそれと同時に自分の理性も養っていくのだ。しかしそれを逆にとれば、子供とはまだ経験・知識に乏しく、理性も完全ではない状態にいと云える。つまり、人間から経験や知識といったものを一切排除したのが本来の人間の姿ならば、それはすなわち子供であり、子供こそが人間の真の性質を示すものである。また、大人が一人もいないことは何を意味しているのか。自分たちの生活が行き詰まり、ラーフやピギーが秩序のある大人の社会を崇拜し、大人の助けを切望する場面がある。それは、大人が豊富な知識を持っているだけでなく、子供の本能的行動を抑えることができるからだ。子供が大人のいる社会で生活している場合、子供は、親からのしつけや学校といった様々な方法、つまり大人という抑制力によって本能的行動を止められている。したがって大人が一人もいないことは、子供を抑制するものがないことを意味する。

このようにして考えると、ゴールディングがこの対立を通して言

いたかったことは、無人島のような自分を抑制するものがない状況では、人間は本来本能のままに行動してしまうものであり、しかもその心は不安・恐怖・欲望などの負の感情によって簡単に悪に転落してしまうということ、そして、自分にもそのような可能性があるとは知りもしない文明社会における我々への警告であるのだろう。

結論

これまで本論では「ラーフとジャックの対立」「サイモンと蠅の王」について書いてきた。ここでは、これらより分かったことを踏まえ、ゴールディングが「蠅の王」という物語を通して私たちに伝えたかったことを読み取って行きたいと思う。

この本が出版されたのは一九五四年であることから、作品を書き始めたのは第二次世界大戦直後でまず間違いないだろう。あれほどの規模の戦争であり、またゴールディング自身も、イギリス軍に加わって、実際に戦闘も経験しているのである。「蠅の王」はある種の戦争を描いており、第二次世界大戦の影響を大きく受けていると考えられる。

実際に物語を解釈すると、非常に第二次世界大戦と重なる部分が多いことがわかった。ジャックは、先天的に理性がなく、「獣」に侵食されていて、そのために物語後半に暴挙に出ているようにも思えるが、「ぼくらは野蛮人じゃないんだ。イギリス人なんだ。」(六八頁)と言っているように、元々は社会における「規律」を備えていることがわかり、元々、先天的に理性を備えていなかったわけではないと言えるだろう。となると、なぜ本能で行動するようになって

しまったのだろうか。第二次世界大戦と照らし合わせると、ある人物とジャックの共通点が見えてくる。

その人物は「ヒトラー」である。ジャックと同じく、ヒトラーは元々から、あの残虐さを持っていたわけではないのである。まだ政治に登場したばかりの頃は、ヒトラーは非常に誠実な男であり、世界大戦時のような人物ではなかったのである。つまり、まだ欲望、「獣」を「理性」で押さえ込み、「秩序」を保っている状態であったのだ。ドイツ国民はそんな彼に大きな期待を持ち、最高権力者に選んだのであった。しかし、最高権力者になったヒトラーはそれ以前のヒトラーとは違っていた。最高権力者となった彼を抑制するものは無くなり、武力を利用して、ヒトラーは独裁者へと変貌していった。彼は、ヨーロッパに伝わる伝説の宝、たとえば有名な「十二騎士の円卓」を行って、聖杯について調べ、それを手に入れようとしたように、彼は個人的な欲望でその権力を乱用していた。また、彼はオカルトを信じていて、それによって野望を抱き、他国を攻撃していったとも言われている。

これは、まさにジャックそのものではないであろうか。先ほども述べたように、先天的には理性があつて行動していたジャックは、ある時、仮面を身につけることによって、恥辱等の、欲望を抑える役割を持つ感情を失った。つまり欲望が理性を勝つたのである。まさに安部公房著作の「箱男」と同じなのである。そうして、ジャックは、ヒトラーがドイツの独裁者になったように、合唱隊を引き連れる独裁者となるのであった。そして彼は、個人的な欲望、つまり、「豚」を求め、完全に理性を失った行動に出ることになったのである。

る。そして、ヒトラーとジャックを重ね合わせる最も重要な表現が文章中に存在する。それは、「獣」について最も深く理解していたサイモンの考えであった。

いくら獣のことを考えても、結局彼のいわば心の眼の前に現れてくるものは、英雄的であるとともに同時に病める一個の人間の像であった。(一七三頁)

物語中で獣に冒され、まさに「獣」そのものと化していた英雄的な存在、つまりはリーダー格の人間。それはまぎれもなく、ジャックのことだ。そして、第二次世界大戦中、獣に冒されていた英雄的存在。それこそヒトラーだ。二人の独裁者の、非常に似通ったポイントであり、ゴールドディングはまず間違いなく物語中で、「ジャック」という独裁者を通して、「ヒトラー」を描いていたのだろう。

では逆に、ラーフはなぜそうならなかったのだろうか。本能をおさえこむキーポイントは、今まで何回も述べている「理性」や「秩序」、「規律」等である。つまり、ラーフは最後までこれを保っていたことになる。ラーフは別に、先天的に心に「獣」が巣食っていたわけではない。

「ぼくががーんとやったんだ。槍が突き刺さってね。僕が傷を負わせたんだ」あらためて一同の尊敬のまなざしを彼は浴び、狩猟も案外いいものだと感じた。(一九一頁)

とあるように「理性」を失う象徴となっている豚狩りに、快感を覚えたのである。つまり、ラーフにも間違いなく本能があるのだ。そしてその本能がラーフの理性を勝っているのにも関わらず、ラーフは最後まで秩序あるものとしてジャックと対立していく。ラーフは

「何か」によって最後まで理性を保てた。その「何か」を明らかにしていくにあたってまず一つの疑問がわいてくる。そもそも、なぜラーフは、リーダーに選ばれたのであろうか。

聡明さにかけては、ピギーに一日の長があったし、指導者らしい指導者は明らかにジャックだった。しかし、じっと腰をおろしているラーフのおちついた態度には、何か彼をきわだたせるものがあった。からだの大きさ、魅力的な風貌、ということもあった。ほら貝を吹いた存在、ほら貝という一種独特なものを両膝の上に抱いてこの高台の上で座り、みんなのくるのを待っていた存在——こういう存在は他の存在とは別格であった。

(三三頁)

ラーフは指導者に適する特徴を持っているわけではなかった。当然、その原因は、「ほら貝」であることは言わずもがなのことである。「ほら貝」は、「秩序」の象徴である。また、リーダーであるという責任感から、ラーフは様々な「規則」、「獣」と相対するものを作っていた。そして、その手助けをした、大人の思考をできるピギーがラーフにはついていた。このような要素から、ラーフは最後まで理性を保つことができたのである。

物語後半で、無人島という独立した地域、つまり一つの世界でジャック派とラーフ派は対立してはいたけれどジャックとラーフは本質的には変わらないのである。その中で出てきた「違い」が対立の原因であり、ジャックの社会とラーフの社会がそれぞれ対立したのである。

第二次世界大戦を無人島に表現しなおしてまで、ゴールドディング

が私たちに伝えたかったことは何なのであろうか。ゴールドディングはラーフがジャックのどちらかが正しい、つまり、米英、若しくはドイツのどちらかが正しい思想をしていると言っていたのであろうか。「蠅の王」の一番最後の部分に、非常に重要な表現が凝縮されている。

「初めはうまくいっていたんです」と、ラーフがいった、「でも、そのあとで、いろんなことがあって——」

彼はいうのをやめた。

「ぼくらは初めはいっしょに団結してやっていたんです——」仕官は、相手の心をはげますように頷いた。

「ああ、分かっているよ。初めはものすごくうまくいっていたんだね。『珊瑚島』みたいにね——」

ラーフは黙って仕官の顔を見た。一瞬間、かつてこの浜辺をおおっていた、あの不思議な魅惑の面影を思い浮かべた。しかし、島は朽ち木のようにかさかさ干からびてしまったのだ——サイモンも死んだ——そして、ジャックのやつが……涙がとめどなく流れ、彼はからだを震わせて嗚咽した。

(中略)

その間、沖合遙かに停泊している端正な巡洋艦の姿に、じっと眼をそそいでいた。(三四七—三四八頁)

ゴールドディングはノーベル文学賞を受賞するほどの実力の持ち主であった。「蠅の王」は、私達にメッセージを伝えるための作品である。余計な表現は殆ど無いと言ってよい。そこにあえて巡洋艦に「端正な」という表現を付け加えていることが非常に大きな意味が

あると考えた刹那、すべての辻褄が合った。その前までに島での生活は、初めはうまくいっていたが、後からだんだんと崩壊していった、という表現がある。そして、島では、初めは「あの不思議な魅惑の面影」を感じるものであった。そして、これから島から外へ出て行く巡洋艦は、「端正」なのである。つまり子供たちは「魅惑のある島」というプラスのものから「朽木のように干からびてしまった島」というマイナスのものへの崩壊を一旦辿り、そして再び「端正な巡洋艦」というプラスのものへと導かれているのだ。ここから子供たちが今後プラスの状態で生きていくように思われるがそうではない。なぜならその巡洋艦の向かう先が平和な世界ではなく、戦争の真っ只中の混沌とし、狂気に満ちた世界であるからだ。プラスからマイナスへ、そして再びプラスへと導かれた子供たちはまた同じ崩壊の道を進むことになるということをゴールディングは示唆していたのだ。

またこの子供たちの対立は、第二次世界大戦の縮図である。そのため子供たちが同じ転落を繰り返すということは第二次世界大戦のような残酷な出来事がまた繰り返されることと等しい、つまりは、「歴史は繰り返す」ということである。しかし、これはあくまで結果である。このように訴えかけることからして、もちろんゴールディングは戦争など望まず平和を願っているのである。つまり、ゴールディングにとって、ラーフの社会もジャックの社会も、どちらも必要なものではなく、第二次世界大戦において、独、あるいは米英のどちらかが正義であるはずが無く、戦争をして、人を殺している時点でどちらの社会も正しくは無いのである。

ゴールディングが願う平和を物語の中でも願う特異な存在、サイモン。本来人間の心は悪に転落しやすいものである、それはほとんどの人がサイモンのように自分から真実を見ようとせず、理解しようとしなからである。そのためゴールディングは、サイモンのような悪に転落しない心を持った人間が現実必要であり、そしてそれぞれの人間が自分から真実を理解しようとする必要があると私達に訴えかけているのだ。

しかし、物語中にもあるように、サイモンは結局は特異なのであり、大多数の、社会でいう「普通」な人間に理解されず、悪に冒された者によって消されてしまう。そして人々は自分から真実を理解しようとするきっかけを失うのだ。だからこそ、悲惨な歴史は繰り返されてしまうのである。

今になって、ゴールディングの予言は当たる、という結果になってしまった。米ソによって第二次世界大戦は強制的に終了した。その後、世界は順風満帆であるかに思えた。しかし、無理矢理領地等を区分したはずだが、今、民族紛争やイラク戦争という形になってゴールディングの予言は的中したのである。

繰り返す歴史を止めるには、サイモンだけでは無理だ。あくまでも、サイモンは社会の中のほんの一部なのだから。大事なのは、サイモンのことを知った「普通」の人がそれを否定するか、認めるかのどちらを選ぶかだ。ゴールディングは、自身の物語を読んだ人に、「認める」という選択肢を与え、真実を理解するきっかけを捨てないで欲しい、という強い希望をこの物語に込めているのだ。